
真剣で私はコレクター

ふなむし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私はコレクター

【Nコード】

N5185V

【作者名】

ふなむし

【あらすじ】

川神学園、2-S。そこにいる平凡？ そうなビン底メガネ。彼の名は湊 京夜。彼はあるコレクターだった。そのために川神学園に入学し、Sクラスに入った。彼の集めているものとは！？ この作品はチートあります。そして私は原作未プレイです。色々なところが間違っていると思うのでどんどんご報告ください。

プロローグ（前書き）

※注意です。チートです。原作未プレイです。作者は厨二病です。
それでも良いという方は楽しんでいただけたら幸いです。

プロローグ

川神市、今日の川神学園は沸いていた。「決闘」自体はよくあるのだが、ここまでの好カードは最近はなかったからだ。闘っているのは、薙刀を持った少女、川神一子。もう一人はクリスティアーネ・フリードリヒ。ドイツからやってきた留学生。武器はレイピアを使っている。

「さあさあどっちが勝つか！賭けて賭けて！！」

川神学園の特殊なところは「ハングリー精神を養う」とかいって「決闘」というものがあることだ。

お互いのワッペンをたたきつけることによって成立し、職員会などで会議されるのだが、今回は学院長、川神鉄心の一声で決まった。そして学校公認？の賭けがはじまる。賭けないけど。

「「うおおおお！！」」

周りの観客の喝采が聞こえる。おそらく、決着がついたのだろう。俺は見えてないが。

「こんなくだらない試合を見てもなあ・・・」

俺は足早に学校を後にする。家について気がついた。

「あ、授業残ってたわ。はあ・・・くだらねえー」

さっさと制服から私服へと着替え、家を出た。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「さてと、今日はやってるかなあ・・・」

俺が来たのは通称、青空闘技場。チンピラやヤンキー、やけにテンションがハイなサラリーマン。ブサイクな金髪女。そんなやつらが集まっている。

「お、やってるのか。あいつらかな？」

闘技場に入るとマイクを持ったハイテンションなヤンキーが叫んでいた。

「レディース、アーン、ジェントルメーン！今日も彼らを止めるやつはいないのか！！」

闘技場の真ん中にはリングがあり、そこにはゴルフクラブを持った少女と血まみれの大男が倒れている。

「てめえがアタシを倒すとかありえないっつの！！」

倒れてる男の頭を笑顔でフルスイングで打ち抜く少女。

リングに寄り、声をかける。

「よう、天」

「あ！京兄いじゃん！！」

さつきと同じ笑顔で駆け寄ってくる。コイツは板垣^{えんじえる}天使。板垣家の末っ子だ。

「今日はどうしたの？最近来てなかったし」

「ああ、学校でちょっとね・・・亜巳さんは？」

「亜巳姉え？あそこに座ってるよ」

天使が指差したほうには、四つんばいの中年男性とそれに座る板垣亜巳の姿が。

天に礼を言い、板垣亜巳の方へ歩いていく。

「よう、亜巳さん。・・・相変わらずでなによりだ」

「ん？ああ、京夜。すぐにわからなかったわ」

「お？ああ、これ？」

俺はかけていたビン底メガネをはずし胸ポケットにしまう。

「京夜。あんた、割とイイ顔なのにそれで台無しだぞ？」

「いいの。ガッコでは目立ちたくないし」

「まあいいけど。で、あんたもやってくの？」

「おう。久しぶりにな」

「いいけど・・・あんまり壊さないでくれよ？」

「わかってるさ。壊すのは相手だけ」

茶目っ気たっぷりにウィンクをするが、ため息吐かれた。

そんな亜巳を横目にリングにあがる。

「さあてと！あー、こいつらに恨みがあるやつみんなまとめて来い。俺が相手してやる」

板垣家を指差しながらそう言うと、何人かは立ち上がってリングに上がってくる。

「オイ、テメェ！覚悟はできてんだろーなあ！！」

「チョーシこいてんじゃねえぞ、ああん！！」

俺の前に立つ身長180cmくらいのチンピラ。後ろにも似たような連中が10人ほど。

「怒鳴ってんじゃねえよ。うるせえな。・・・ほらどうした！来ないのか？」

相手に犬を呼ぶかのような仕草をする。やつら顔が生まれたての赤ん坊みたいに真っ赤になる。

「うおおらあああーっ！！」

180cmのやつストレッチ。俺は軽く沈んでかわし、伸びきった腕の下、わき腹に掌低を入れる。きれいに掌低が決まり、ひるんだやつの胸に向けて今度は拳を叩き込む。

「がはあッ！？」

「まだ行くぞオラァッ！！」

胸を押さえて屈んだやつの頭めがけてかかと落とし。中々に鈍い音がして相手は倒れる。そんなで終わらないけどな。

「起きろよ。おい」

倒れているやつを両手で持ち上げ膝で顔面を潰す。頬骨と鼻が折れて変な顔だ。

「おーい。起きないのか？まだやつちゃうよ？」

続けて何回か膝を叩き込む。なんかヒューヒューいってるが気にしない。

「起きないのかよ・・・つまんねーな。おい、次は？」
そういつて後ろにいたやつらを睨むが、

「お、おれはやりたくねえ！死んじまう！」

「てめえ、逃げんのかよ！畜生が！俺が行くぜ！！」

何人かは逃げ出し、残ったのは2人。

「どっちからくるの？それとも同時？」

「俺からだ！！死ねええええー！！」

「馬鹿じゃねえか？お前」

何も考えずに殴りかかってくる。ただがむしやらに腕を振るってるだけなので楽にかわせる。

「クソッ！クソッ！逃げてねえでかかってこいよ！！」

「馬鹿じゃね？といったが訂正だ。お前は馬鹿だ」

「うるせえーんだよ！！」

ヤツの得意技なのか渾身の右ストレート。それを右にかわし、背後を取る。

「ほーら。腕はずしちゃえ」

後ろに両腕を引き、肩を足で前に押し込む。ゴキリッ！と音がしてチンピラが喚きだす。

「ヒヤア、ア、あ、肩がつ、アアア！！」

「わめくんじゃねーよ。うるさいな。・・・あれ最初も似たようなこと言ったな」

そういつつヤツの肩を足で踏みつける。もう一人のほうも闘う気が失せたのか、リングの隅っこで縮こまっている。

「その辺にしときな、京夜」

亜巳さんのムチが俺の脚に巻きつく。

「・・・わぁーったよ！あーつまんね」

リングを降り、帰ろうとすると、

「あー京夜君だー」

俺の目の前に現れたのは板垣辰子。何気に背が高く、俺と同じくらいある。

「ねー京夜君。お昼寝しよーよー」

「あーあーまた今度な。今日はもう帰るわ」

「えーもう帰っちゃうのー？」

「おう。じゃあな」

胸ポケットからビン底メガネを取り出し、装着する。

「では、みなさんさようなら」

深々と頭を下げ、優等生ぶりを発揮してから闘技場を後にする。

「メガネの京夜君もカッコイイな」

「いやあのメガネはどうかと・・・」

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

闘技場からの帰宅には親不孝通りを通る。ここは川神市でも危険なところだ。

女が歩けばすぐさま裏路地へ引き込まれ、散々犯されたあと、ゴミ捨て場に放置され、ひ弱な男子が歩けば絡まれてボコボコにされるか薬漬けにされるか黒服に売られるか。そんな場所だ。

「おいてめえ！いまぶつかっゴハアッ！！」

絡む、もしくはいきなり襲い掛かってきたヤツはすべて血まみれにしてる。それが強さの証明であり安全のパスポートでもあるからだ。チンピラ共は息を殺し、俺が通り過ぎるのをまっている。まあ、気晴らしに立ち止まるけど。

ビン底メガネが通ったあととは真っ赤な血液と男共のうめき声が響いていた・・・

プロローグ（後書き）

皆さんよく1万字とか書けますよね（憧れ）
私も書いてみたいです！1万字・・・無理そうですが＜＜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5185v/>

真剣で私はコレクター

2011年10月8日23時24分発行